

雨夜の品定め

小川 稔



ははきぎ
帯木のころを知らでそのはら藪原のみちにあやなく惑ひぬるかな

「尋ねまほしき園原」をまだ訪ねてはいないけれど、当地には気になる木がある。遠くから見えて、近寄ると消えてしまう魔法の木「ははき木」が昔から知られ、紫式部の『源氏物語』第二帖「帯木」の巻名にもなったという。

鬱陶しい五月雨の夜の話。ハイティーンの公達四人が暇つぶしに女性談義をしている。物語の若き主人公、光源氏のもっぱら聞き役で、経験豊富な友人らの恋話に耳を傾けている。

上流の女子は気位が高く、教養豊かでも家庭の夫人向きではない。それより、どこかに隠れ住む器量、素養ほどほどに良い中流の女子はいないものか、などと勝手な話。

全部で五四帖ある長大な『源氏物語』のほぼ導入部に当たるこれは小さな話題だが、案外重要な伏線で全巻を貫く動機となっている気がする。遠く仰ぐ理想も近づけば卑近な現実が見えてくる。真実の在り処を巡る主題は、時代を超えて読者を共感させるのではないか。

先輩の言葉を鵜呑みにし、早速行動に移した源氏だが、まず人妻空蟬うつせみとの恋愛に失敗する。冒頭に掲げたのはその時の和歌。この後も源氏の女性遍歴はすれ違いの連続となるのだ。

遠くから観ていた幻想と近くで見る現実、その中間に真実があるのかもしれないという教訓だが、美術を専門とするものとして、もう一つ気になることがある。この帖で作者紫式部は絵画の見方、評価についても大事なことを言っている。

神話世界の蓬莱の山、異国の怪獣、眼に見えない鬼などを想像に任せて描き、人を驚かせるのは簡単で、それより、世の中の常の姿、美しい自然をありのままに、懐かしく描く方が難しく、上手な絵師でなければできないのだという。

この意見は女性観、芸術観にとどまらず、一般のものごとに及ぶだろう。わが国の批評の始まりといってよい。何事につけ、極大と極小の間に真実の在り処があって、多分、われらはその中間で右往左往している。

(おがわ みのる 松本市美術館館長)